残薬解消で皆の健康を守りたい

岡山県早島町・早島小４年　平松　夢

体調が悪ければ病院に行って薬をもらうが、どんな薬なのか気にすることはあっても、飲み忘れたりして残ってしまった薬のことは、この記事を読むまで考えたことがなかった。

まず私は家に残薬があるか調べてみた。すると、飲み切らずに余らせた薬が思った以上にあることに驚いた。となりに住む祖父母にも残薬調査を行うと、急な体調不良の時に必要という理由で残薬を保管していたが、残った薬の種類は様々で、祖父母がうっかり飲み間違いをしないのだろうかと不安を感じた。

この残薬問題は、きっと我が家だけの問題ではないと考えた私は、近所に住む人達にアンケート調査を行った。すると、高齢者の人ほど残薬の量は多く、「いつも同じ薬だから大丈夫」「体調が悪い時にすぐ飲めて安心」などの理由から残薬を保管する人が多いことが分かった。また「お薬カバン」があれば使ってみたいかたずねると、ほとんどの人が使いたいと回答した。

私はこの調査結果を持って近所の人が利用する薬局へ行き、残薬問題解消に向けたブラウンバッグ運動について相談した。すると薬剤師さんから、お薬バッグを以前配ったが県南地域では普及しなかったこと、残薬整理をするには薬剤師の数が足りないこと、この薬局での残薬調整希望者は千三百人中わずか数人で、この運動を広げる難しさを教えられた。

しかし、私は問題解決方法を考え、町役場の健康福祉課に行き、町内でこの運動ができないか提案した。残薬量が多い傾向の高齢者に町内の小学生がデザインしたお薬バッグを配り、エコバッグのように使ってもらうのだ。町からは検討すると返事をもらえたが、それで満足するのではなく、私はこの運動を理解してくれる人を一人でも増やすための呼びかけを行い、残薬解消と地域の人の健康を守るためにこれからも訴え続けたい。そして、皆が安心して笑顔で健康に暮らせる社会を実現するため、私はあきらめず行動していきたい。

患者が飲み忘れるなどして自宅に積み重なっていく「残薬」の解消に薬局が取り組む「ブラウンバッグ運動」が、県内でも広がってきた。患者にバッグに残薬を入れて持ってきてもらうことで薬剤師が実態を把握し、処方医と協力して飲み忘れ対策を講じたり、再利用や減薬につなげたりといった薬の適切な管理・処方を図る狙い。慢性疾患を抱え定期的に薬を服用する高齢者が増える中、県や国も運動を後押ししており、高齢化の進む県中北部を中心に県南でも取り組むところが出ている。（水嶋佑香）

「残薬」解消 取り組み拡大

ブラウンバッグ運動

「ここに薬を入れてからね」。鏡野町上原の薬剤師の冨永秀美子さん（71）が医師の処方箋に書かれた薬をバッグに詰め、高齢の女性患者に差し出す。

同薬局は2019年度から運動に取り組む。残薬の持参時だけでなく、新たに処方された薬を持ち帰ってもらう際にも使い、置き物等のエコバッグさながら「お薬バッグ」として利用している。

残薬が持ち込まれたら和合さん「と効果を説明する。

実証実験

県内で運動が浸透しつつある。

高梁市と新見市の19薬局で行われた。現在は実験から8カ月ほどたつ。患者の自己負担（原則最大3割）分を除く大半は公的医療費で賄われており、国は地方政治と薬剤師会（07年度）によると、残薬の薬剤費は年間約475億円にもなる。患者の薬代の節減や、医療費の節減効果も期待されている。

日本薬剤師会の試算

県内薬局　飲み忘れ対策、減薬に

2021年10月1日付　山陽新聞

(C)山陽新聞社　無断複製・転載を禁じます。